動力学模型による Md-258の核分裂計算

石崎翔馬1,奥林瑞樹1,宮本祐也1,有友嘉浩1,廣瀬健太郎2,西尾勝久2

¹Graduate School of Science and Engineering Research, Kindai University, Higashiosaka 577-8502, Japan ²Advanced Science Research Center, Japan Atomic Energy Agency (JAEA), Tokai, Ibaraki, Japan

発表内容



- Md-258の核分裂計算結果
- ・まとめ
- 今後の課題

重元素及び中性子過剰核の核分裂



A. Staszczak et al., Phys. Rev. C 80, 014309 (2009).





ブロードな分布

質量対称分裂

ト

質量非対称分裂





Fragment mass (u) E.K.Hulet et al., Phys. Rev. C, 40, 770(1989)

フェルミウム領域の核分裂特性



Md-258は境界線近傍に位置する核種

研究背景





マルチモード核分裂



原子核の形状およびポテンシャル



ランジュバン方程式

$$\begin{aligned} \frac{dq_i}{dt} &= (m^{-1})_{ij} p_j & p_{jk} p_{$$

$$q_i$$
 :二中心間模型の変数座標 (z, δ, α)

 p_j : \mathbb{I} : \mathbb{I} : \mathbb{I}

 R_i

m_{ij} :慣性質量(Werner-Wheeler近似による流体力学模型)

 γ_{ij} :摩擦係数(Wall and Window形式による一体散逸)

:乱数 $\langle R_i(t) \rangle = 0$, $\langle R_i(t_1)R_j(t_2) \rangle = 2\delta_{ij}\delta(t_1 - t_2)$:白色雑音

$$\sum_{k} g_{ik} g_{jk} = T \gamma_{ij} : T \Lambda v \rangle_{jk}$$
 タインの関係式

Actinide領域における核分裂片質量収率とネックパラメータの相関 Ex = 10-20MeV



フェルミウム領域における核分裂モードの劇的な変化の理論解析 Ex = 7.0MeV



Y. Miyamoto et al., Phys. Rev. C, 99, 051601(R) (2019).

計算条件 (Md-258)



計算結果

δ (変形度) 分布およびδ-TKE分布



まとめと今後の課題



- εと質量数の相関を導入しMd-258の核分裂計算
 を行なった
- ・運動エネルギー分布に関して、実験結果とは異なる傾向が得られた。

実験結果にはあまり現れていなかった<u>supershortモード</u> <u>(コンパクトな対称分裂)</u>が支配的であった



- 実験結果が示す傾向を再現
- 核分裂モードごとの変形経路の解析

今後の課題

実験結果が示す傾向の再現

計算で使用したε=0.66,E_d=20MeVが適当かどうか

εと質量数の相関を用いた場合、Fm同位体における 非対称分裂→対称分裂への遷移は確認されたが、 Fm-257→Fm-258での遷移は再現できていない。 今後の課題

核分裂までの原子核の変形過程

ϵ =0.66,E_d=20MeV,E^{*}=15MeV



どのような変形過程をたどるのか?

ご清聴ありがとうございました